

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランス語の動詞組織について : 16世紀から17世紀の代名動詞の推移を中心に <修士論文及び卒論要旨>
Auther(s)	森岡, 敬史
Citation	広大言語 , 9 : 20 - 22
Issue Date	1969-12-23
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046338
Right	
Relation	



二回目の授業もスムーズに終り、児童の顔と名前が、そろそろ一致しだしたと思つていると、もう中・高担当の二週間目がやつて来ました。中・高では小学校程、生徒との連帯感がありませんでした。

中学校二年生を一回、高校一年生を二回担当したのですが、自分では、解つている積りでいても、その知識が、どんなに曖昧なものであつたか、教えるという立場に立つて、初めて解つたような気がします。

中学校の場合は、oral exercise が主なので、自分の発音は果たして、これで良いのだろうか、生徒に与える英語の発問がスムーズに出てくるだろうかと初中終気になりました。高校の場合は、「ここは間違つています。」と声を大にして言おうとすると、妙に自信のなくなることが度々あり、“知つている”ことと“人に教えることが出来る”こととの間に横たわるギャップを、しみじみと感じました。

総じて言つて、教育実習に行つて良かったと思うのは、立派な教師になることの難しさ、その責任の重さといったものが、多少なりとも、感じ取ることが出来たということです。

— 10月23日 —

修 士 論 文 題 目

倉 田 馨 円 「法華經（散文）に於ける動詞の位置について」

林 勲 「On the Jakobsonian Distinctive Feature Theory」

（なお、いずれも後日くわしい論文として発表予定）

『フランス語の動詞組織について』

— 16世紀から17世紀の代名動詞の推移を中心に —

まえがき 世に歴史は繰り返すと言う。確かに歴史は弛緩と緊張とを繰り返して来た。その中で人間は太古から現代まで着実に発展して来た。歴史を作つている一要素としての言語の歴史も同様である。以下16世紀、17世紀の、それも代名動詞という狭い範囲ではあるが、2つの時代の代名動詞の用法を比較することによつて、それがどのように変化し

たか、その背景に目をやりながら論を進める。

第一章 16世紀、17世紀の代名動詞について述べる前にラテン語、古代フランス語に於ける代名動詞の状態、或は発展過程を簡単に述べる。

第二章 16世紀を代表するラブレーの「第一之書カルガンチュア」、17世紀を代表するパスカルの「パンセ」を通して、それぞれの時代の代名動詞の使用法を述べる。

「再帰代名詞 *soy*」「代名動詞の不定調」「代名動詞の過去分詞の一致」「代名動詞の用法」の4つの代名動詞を取り囲む環境に視点を当てて考察

第三章 「言語の発展・推移はその時代の社会を反映しながら一体となつて進むものである」との観点から16世紀、17世紀の時代背景とフランス語の関係について述べる。

参考文献

- A. Lefranc Oeuvres de François Rabelais
tome I, Gargantua, Paris, Champion, 1912,
tome II, Gargantua, Paris, Champion, 1913,
tome III, Pantagruel, Paris, Champion, 1922,
渡辺一夫 世界文学全集 - 4, ラブレター、ガルガンチュアとパンタグリニエール物語, 河出書房
- B. Pascal Pensées, Livre de Vie, 1963
前田陽一 世界の名著24、パスカル,
パンセ, 小品集, 中央公論社
- J. Vendryes Le Langage, Paris, Albin Michel, 1950
- A. Darmesteter
A Historical French Grammar, London,
Macmillan, 1934,
- F. Brunot et C. Bruneau
Précis de Grammaire Historique de la
Langue Française, Paris, Masson, 1949,
- G. Gougenheim Systém Grammatical de la Langue
Française, Paris, D'Artrey, 1939,
- G.L. Bidois et R.L. Bidois

- Syntaxe du Français Moderne, tome I, tome II
Paris, Picard, 1967,
- J. Bourciez Elements de Linguistique Romane, Paris,
Klincksieck, 1946
- A. Dauzat フランス語の歩み、川本茂雄訳 白水社
目黒三郎 新フランス広文典、白水社
朝倉李雄 フランス文法事典 白水社
田辺貞之助 現代フランス語文法 白水社
高津春繁 印欧語比較文法 岩波全書
- R. d'Hauterivie
Dictionnaire d'Ancien Français, Paris,
Larousse, 1947
- A. Dauzat Dictionnaire Etymologique, Paris,
Larousse, 1941,
- 田中秀央 羅和辞典 研究社
河盛好蔵 フランス文学史 新潮社
松田智雄 世界の歴史7 中央公論社
金沢誠 フランス史 ダヴィッド社

『日本語における借用語の 意味変化』

屋敷睦美

言語の変化には、その内部に原因がはさまれている内的なもの、外部からの影響によるものがある。後者に属し、言語変遷に強力な作用を及ぼす要因の一つに借用がある。ここでは、日本語における借用語のうち、特に「欧米語から取入れた言葉」に限定して、それを意味論的に考察する。

まず借用語の意味変化を大きく二つのタイプに類別する。1借用時における意味の変化、2借入後の意味の推移。更に前者を1意義領域の縮少、2誤解による転移、3省略、4名詞化、後者を1意味の拡張、2意味の縮少、3転移、4意味の向上、5意味の下落6婉曲語法に分けて、それぞれ